

(1)規格外品と言われないように

5月に入ってGWの期間中は4月の天候不順など忘れさせる好天に恵まれ、久しぶりにレジャー分野が遠近を問わず家族連れで賑わい、デパートなどの商戦も前年が不振だっただけに好況を呈したと言います。テレビを始め、マスコミの眼も高速料金千円に代表される行楽に奪われてしまったようです。4月下旬にあれだけ大騒ぎした、かの規格外野菜云々も全く無視され、僅かに道の駅での新鮮で安い野菜をお土産にと喜ぶ風景のみがニュースになっていたに過ぎません。

季節外れの寒さや日照不足が続いて春野菜を中心に値上がりしたことから、農水省が規格外野菜などを含めての前倒し出荷を要請したり、大手スーパーが曲がった胡瓜や変形したり小さかったりするキャベツを並べて話題となりました。しかし、天候が落ち着きをみせてくると卸売価格も小売価格も一時の高値相場から反落して、買手主導の需給関係に戻ってしまいます。天候に左右され影響を受けるものは出回り期の野菜たちだけでなく、生育途中にある野菜や果実でも花落ちや凍霜害などの被害を心配しながら励んでいる生産者の意を汲んでもらえないままのようです。

確かに消費流通の仕方は大きく変わってきているのに、農産物の生産・流通に関わる基準や規格などは守旧的だと言わざるを得ないのかもしれないかもしれません。素材としての内容に大きな変更が加えられないままに流通し、消費する家庭消費に利する基準だからこそ、色や形、大きさなどの見てくれの良さが強調され過ぎて、結果的に規格外品や廃棄せざるを得ないものが出る場面も多いはずですが。流通の都合で半端物として処分されざるを得ないものが、何かの折にではなく、いつでも何処かで評価される仕組み作りを考えなければならないのではないでしょうか。

多様な消費流通の中では用途によって求めるものが違うだけに、外観偏重だけでなく、旨さや使い勝手の良さなど、消費する側に納得してもらえる価値を強調して売場を拡げることが必要ではないでしょうか。緊急時にだけ欲しがられるのではなく、定番商材として評価してもらえるよう品物に説得力を持たせる努力が作り手に求められると思います。

(鈴木重雄筆)